

大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育

Subject Specialists in Academic Libraries  
and Subject Specialty Programs

加 藤 修 子  
Shuko Kato

*Résumé*

This paper reviews the subject specialists in academic libraries and subject specialty programs. The issue of the subject specialists in academic libraries has been discussed with the issue of the types of library organization such as subject divisionalism in American academic libraries and subject specialization in British academic libraries. Based on their historical background, the author clarifies the expected role of the subject specialists in recent years through the change of academic libraries and their environment.

After then, subject specialty programs are discussed, namely, the education for the subject specialists. Based on their historical background, the author reports the recent subject specialty programs, focuses on one of them; the joint-degree program, and clarifies its possibility as the subject specialty programs.

Finally, the subject specialists and the subject specialty programs in the recent information society and the recent trend of the education for library and information science are evaluated, and their futures are examined.

- I. はじめに
  - A. 目的と範囲
  - B. 文献の検索方法
- II. 主題部門制と主題専門制の歴史的推移
  - A. 米国の大学図書館における主題部門制
  - B. 英国の大学図書館における主題専門制
- III. 主題専門図書館員
- IV. 主題専門図書館員養成のための教育
  - A. 主題専門教育の歴史的推移

---

加藤修子：大東文化大学非常勤講師，東京都板橋区高島平 1-9-1

Shuko Kato: Part-time Lecturer, Daitobunka University, 1-9-1, Takashimadaira, Itabashi-ku, Tokyo.  
1992年9月1日受付

## 大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育

- B. 現在の主題専門教育
- C. 分野別主題専門図書館員とその教育
- V. 主題専門教育としての複合学位システム
  - A. 複合学位システムの概要
  - B. 複合学位システムの問題点
  - C. 主題専門教育としての複合学位システムの評価
- VI. 日本における主題専門図書館員事情
- VII. 主題専門図書館員と主題専門教育の評価と展望
- VIII. おわりに

### I. はじめに

大学図書館における主題専門図書館員の問題は、これまで米国の大学図書館における主題部門制や英国の主題専門制などの組織形態とともに関心を持たれてきた問題である。しかし、米国の主題部門制も英国の主題専門制も、一時期かなり多くの大学図書館で導入され一応の評価を得ていたが、徐々に減少し、近年は以前ほど関心を払われていない。そして、主題専門図書館についても、その役割に変遷がみられる。それは、主題部門制や主題専門制といった大学図書館の組織形態に伴って配置されていたかつての主題専門家ではない。近年の情報管理、情報処理技術の著しい発展に伴い、これら情報学の知識をもち、大学図書館の高度な主題専門情報の要求に対応できる新しい役割を担った主題専門家が必要とされている。

#### A. 目的と範囲

本稿では、「大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育」についてのレビューを行うことを目的とする。その中で、まず米国の主題部門制と英国の主題専門制を概観する。米国の大学図書館における主題部門制に関する既存のレビューとしては、Edward R. Johnson (Johnson, 1977) の文献と、J. P. Wilkinson (Wilkinson, 1983) の文献があげられる。また、英国の大学図書館における主題専門制に関する既存のレビューとしては、P. A. Woodhead と J. V. Martin (Woodhead, *et al.*, 1982) の文献と斉藤陽子 (斉藤, 1989) の文献がある。これらの文献は、それぞれ主題部門制、及び主題専門制の導入期、定着期、衰退期といった歴史的推移と、衰退を招いた要因を主題専門図書館員の役割とともに述べている。著者は、これらの歴史的推移に基づい

て、さらに大学図書館及び図書館をとりまく環境の変化を通しての近年及び現在の主題専門図書館員に期待される役割を明らかにする。

次に、主題専門図書館員の養成制度である主題専門教育に関して取り上げる。主題専門教育に関する既存のレビューとしては、Robert V. Williams と Martha Jane K. Zachert (Williams, *et al.*, 1986) の文献がある。これは、主題専門教育の歴史的推移を述べたものである。著者は、近年及び現在行われている主題専門教育を提示し、特にその中の一つである複合学位システムに焦点をあて、主題専門教育としてのその可能性を明らかにする。

最後に、近年の情報化社会や図書館・情報学教育の最近の動向の中で、主題専門図書館員や主題専門教育がどのように評価されているかを考察し、今後の展望をみることにする。

#### B. 文献の検索方法

レビューした文献は 1980 年代のものが中心となるが、主題部門制と主題専門制、主題専門図書館員、及び主題専門教育の歴史的推移については、1970 年代またはそれ以前の文献に重要なものがいくつか存在するのでそれも含めた。また今後の動向を検討するうえで非常に最近 (1991 年, 1992 年) の文献も含まれている。レビューをした文献内容の対象となった地域 (国) は、主に米国と英国であるが、その他にドイツ (旧西ドイツ) と日本の事情について記述している文献も含まれる。またレビューした文献の言語は、英語または日本語で書かれたものがほとんどで、ドイツ語のものが一件含まれる。

文献の検索方法としては、次のような手順をとった。まず国外の文献において、主題部門制と主題専門制に関しては、上記の既存のレビューを基に、その引用文献を

適宜参照した。さらに、*Library Literature* の件名〈College and university libraries〉の副件名〈Departmental and divisional libraries〉のもとに関連文献を検索した。主題専門図書館員に関しては、同件名の副件名〈Staff〉と件名〈College and university librarians〉及び〈Special librarians〉のもとに関連文献を検索した。また、*Library & Information Science Abstracts (LISA)* の件名〈Subject specialisation〉〈Subject specialists〉〈Subject experts〉のもとにも関連文献を見つけることができる。

次に、主題専門教育に関しては、上記の既存のレビューを基に、その引用文献を適宜参照し、また、*Library Literature* の件名〈Special librarians〉の副件名〈Education〉のもとに関連文献を検索した。また、図書館・情報学教育一般に関する文献の中にも、主題専門教育について言及しているものがあるので、適宜参照した。

その他、最近の文献については、国立国会図書館図書館研究所編の『カレントアウェアネスの図書館・情報学関係主要外国雑誌目次一覧に常時目を通していった。』

邦語文献に関しては、主に日本図書館学会編の『図書館学会年報の図書館学年次文献目録における分類表の〈図書館員養成〉〈教育〉〈研修〉、〈司書・職員〉〈専門職制〉、及び〈大学図書館〉の項目のもとに関連文献を検索した。た、邦語文献においても、最近の図書館・情報学教育にま関する文献には常時目を通していった。』

主題部門制、主題専門制、主題専門図書館員、並びに主題専門教育について、本稿で対象とした米国、英国、ドイツ以外のその他の欧米諸国や、日本以外のアジア諸国、アフリカ諸国に関する文献も多数みうけられたが、今回はこれらの国々についてはレビューの対象に含めなかった。また、主題部門制、主題専門制、並びに主題専門図書館員について、個別の大学図書館における個別の事例のみを扱った文献は含めなかった。

## II. 主題部門制と主題専門制の歴史的推移

主題専門図書館員の存在は、大学図書館の組織形態である主題部門制並びに主題専門制と大きな関わりをもってきた。そこで、この章では、主題部門制と主題専門制の歴史的推移をみてゆくことにする。そしてこれらの組織形態における主題専門図書館員の役割を明らかにする。

まず初めにいくつかの用語の説明をしておく必要があ

る。まず「主題部門制」という用語であるが、これは、図書館情報学ハンドブック同編集委員会編(1988)によると、『主題別の閲覧室・エリアを設け、特定の主題に関する資料を集中管理し、閲覧・貸出しから参考業務までのサービスを一元的に提供する体制をいう。主題別閲覧室制ともいう』となっている。欧米では、subject departmentalization または subject devisionsalism (Johnson, 1977) と称されている。主題部門制は米国の大学図書館で広く取り入れられた組織体制である。また、これに似た用語として「主題別図書館」(departmental library) があるが、こちらは、丸山昭二郎ほか監訳 *ALA 図書館情報学辞典* (1988) によると、『大学図書館の組織において、特定の学問分野の情報要求に応じる独立した図書館』をいう。大学の学科とか研究室レベルの図書室がこれに属し(長澤, 1990)、「主題部門制」とは区別される。

一方、それに対し「主題専門制」という用語であるが、これは subject specialization (Woodhead, et al., 1982) の訳語である。図書館学の用語としてその概念が明確に定義されていないが(斉藤, 1989)、図書館員の業務が主題別に分担されるような組織形態をいう。英国の大学図書館で一時期広く取り入れられた。

次に「主題専門図書館員」という用語であるが、一般にある特定の主題もしくは学問分野の専門的知識を有する図書館員で、当該主題領域におけるいくつかの図書館サービスに責任をもつとされている。欧米では、一般的には subject specialist, subject librarian という名称が使われている。わが国では、ふつうこれらの訳語として「主題専門家」「主題専門員」「主題専門図書館員」及び「主題専門司書」などの名称が用いられているが、本稿では、「主題専門図書館員」という名称で統一することになる。

### A. 米国の大学図書館における主題部門制

米国の大学図書館における主題部門制の歴史的推移に関しては、E. R. Johnson (Johnson, 1977) の文献と、J. P. Wilkinson (Wilkinson, 1983) によるレビュー形式の文献がある。主題部門制の定義として Johnson (Johnson, 1977) は、『最も一般的な主題部門制の型は、機能や資料の形態よりも主題に基づいて部門化されている。しかし、主題部門制の様式は非常に種々様々であり、標準的な型というものが無い。例えば、多くの大学図書館は比較的広い主題領域別に閲覧室を提供している

が、中には主題部門制の変形とも言うべき部屋割り（配置）をしている図書館もある。従って、全ての例に当てはまる主題部門制の厳密な定義をすることは難しいが、主題部門制による図書館組織の調査に際し、同じ種類の図書館グループを得るために、ある程度任意の基準を設定した：①図書館のサービス機能が、単一の主題より広い分野によって分化される。（ふつう関係の深い2つ以上の主題部門は、主任図書館員あるいはその代理として責任をもつ1人の図書館員の元に部門化される。たとえば、人文科学、社会科学、科学技術というように。）②〔①に加えて〕図書館が、すべてのレベルの学生やその他の利用者に対し、ほとんどの図書館資料に自由にアクセス（開架制）できるように配慮している。③〔①②に加えて〕図書館が主題分野の専門家である選書係を雇用し、利用者に専門的な主題援助を提供する。』としている。

Wilkinson (Wilkinson, 1983) も、主題部門制の定義としては、Johnson のものが最も妥当であるとし、特に③の基準は、主題部門制を採用し主題専門図書館員を配置している類型として重要であると述べている。

Johnson (Johnson, 1977) は、主題部門制という図書館の組織形態を採用した米国の大学図書館の1939年から1974年までの歴史的推移を述べている。1940年代から1950年代の主題部門制組織の定着期と、1960年代から1970年代のその衰退期を提示している。最後に、主題部門制組織の衰退を導いたいくつかの要因、特に、物理的制約という問題や独立した学部図書館設立の影響が述べられている。

米国では大学図書館に先立って、先ず William Pool によって1881年に公共図書館における主題部門制の概念が提唱された。すなわち、総合閲覧室の代わりにいくつかの主題閲覧室をもつ公共図書館の設計計画が提唱された。20世紀に入り、主題部門制の概念は米国の公共図書館の組織やサービス体系に大きな影響を与え、20世紀の初頭に設立された公共図書館の多くは、主題部門制に基づいて組織された (Johnson, 1977)。

一方、当時の米国の大学には、図書館とは別に、比較的狭い主題領域の資料を収集した学科図書室や研究室コレクションが数多く存在しており、部局の図書館として次第に規模を大きくしていった (長澤, 1990)。こうした分散的な図書館の成長は、Harvard 大学、Chicago 大学、Johns Hopkins 大学など特に古い伝統のある大規模大学において見られた (Johnson, 1977)。

1930年代になると、徐々に充実してきた大学図書館では、公共図書館における主題部門制導入などの影響を受け、部局図書館システムを統合化する動きがみられ始め、主題部門化が進められた。そもそも主題部門制は部局図書館のコレクションが大学のキャンパスの中で分散しているという問題の解決策として関心をもたれた。いくつかの部局図書館を統合して、比較的広い主題領域、例えば、人文科学、社会科学、科学技術などの主題に基づいて部門化した図書館は、大学の組織や教育のめざす方向、経営管理の面、サービスを改善する面において、より論理にかなったものであるとみなされた。さらにこれは集中か分散かの論争における一つの妥協策として考えられた。また主題部門制は、利用者への専門的なサービスの提供や、学部学生の要求に応えるべくサービスを改善することを目的とした (Johnson, 1977)。

長澤雅男 (長澤, 1990) は大学図書館が主題部門制を導入することの利点として、主題専門制を採用し主題専門図書館員を配置することができるならば、『主題部門の教員や学生との接触が比較的緊密になり、相互の協力関係が維持しやすくなる。さらに、専門主題に精通した担当者が資料選択や蔵書構成に責任を持つだけでなく、主題分野の詳細にわたる参考調査に応じることができる』と述べている。

1930年代の終わりまでには、米国の大学図書館組織における主題部門化への動きが着実に主流となった。当時少なくとも26の大学図書館が主題部門制のラインにのって組織された。しかし、その後 Drake 大学が1954年に主題部門制を取り止めたのを最初に、主題部門制を廃止するか大幅に修正する図書館が相次いで出てきた。そして、1970年代末の時点でなお主題部門制を容認している図書館は14に減少した (Johnson, 1977)。

いくつかの要因が主題部門制の衰退に影響を及ぼした。1940年代から1950年代は大学図書館において主題部門制は非常に一般的になり、その採用を推進する多くの影響力のある支持者があった。しかしその一方で、多くの図書館はその普遍的な適用を確信できなくなった。主題専門図書館員がいくつかの主題分野の利用者に真に重要な援助を提供することができるのかという疑問もたれてきた (Johnson, 1977)。

一方、大学図書館における学部学生のためのサービスは次第に充実してきたが、新しい動向として、独立した学部学生用の図書館が設立され始めた。1949年に Harvard 大学に学部学生用の独立の図書館が新設され、統

いていくつもの大規模大学がこれに倣った (Person, 1988)。こうして、1960年代には主題部門制が衰退し、代わって学部図書館設立の動向へと進んでいった (長澤, 1990)。

主題部門制が衰退していったその他の要因として、有能な主題専門図書館員を確保することが難しいことや、資料を重複購入しなければならないこと、蔵書の配架スペースに付随して利用者の閲覧スペースを多く必要とするなどのために経費が非常にかかることがあげられる。こうした経済的な問題の中でも物理的なスペースの問題、つまりより多くのスペースを必要とすることと、柔軟性のない図書館建築を強要することが主題部門制を阻む最も大きな要因であるとされている (Johnson, 1977)。

## B. 英国の大学図書館における主題専門制

英国の大学図書館における主題専門制の歴史的推移に関しては、Woodhead と Martin (Woodhead, *et al.*, 1982) の文献と 齊藤 (齊藤, 1989) の文献がある。Woodhead と Martin (Woodhead, *et al.*, 1982) は、1981年英国の61の大学図書館を対象に、主題専門制についてのアンケート調査を行った結果を述べている。その中で、特に主題専門図書館員の役割や地位を明らかにし、それぞれの大学の主題専門制を5つのカテゴリーに分類している。さらに、主題専門制の採用に影響を与えた要因を述べ、その問題点についても言及している。

齊藤 (齊藤, 1989) は、1960年代から1970年代の英国の大学図書館における主題専門制の導入とその要因、1970年代後半からのこの制度の見直し、さらに主題専門制とは異なった情報サービスの拡大に至るまでの過程を述べている。また、主題専門制の問題点と、今日の情報サービスにおける主題専門図書館員の役割についても言及している。

その他に、James Thompson と Reg Carr (Thompson, *et al.*, 1987) は、大学図書館の経営管理の観点から、主題専門制について触れている。

図書館員の業務を主題別に分担、すなわち図書館員が主題別に組織される組織形態が主題専門制である (Woodhead, *et al.*, 1982)。従って米国の例のように、図書館が必ずしも主題部門制的な組織形態をとっているわけではない。英国の大学図書館では伝統的に機能別業務組織がとられてきたが、主題専門制の出現はこれまでの大学図書館における図書館員の組織方法に大きな変化を与え、図書館員のあり方そのものについても問題を提起し

た (齊藤, 1989)。

英国の大学図書館に主題専門制をもたらした原動力の一つは、図書館の利用の増大と利用者を重視する考え方が現れたことであった。それに対応して、まず開架制の採用が行われた。開架制にすることにより、図書館の資料は利用者にとってより利用しやすくなった。さらに個々の利用者の要求を満足させるような図書館サービスを提供するためには、新しい制度の導入が必要であった。そこで現れたのが、1960年代から70年代の初めにかけて英国の大学図書館の中央館で採用された主題専門制であった。これは、主題専門図書館員を配置し、利用者とのコミュニケーションを深めることによって相互の信頼関係を増し、より積極的なサービスを行ってゆくというものであった (齊藤, 1989)。

1960年代から1970年代にかけては、高等教育の著しい拡大期でもあった。大学の拡張や新設が進み、大学に進学する学生の社会階層が広がった。さらに、大学教育の中に教員と学生間の議論を中心とする tutorial method が導入され、学生が予習や自己学習を必要とするようになったことから、大学図書館の利用が増加し、さらに図書館に対する期待と要求が高まった。大学図書館はこれに応えるために、まず、資料に自由にアクセスできるように開架制を採用し、閲覧利用スペースを充分確保するために新增築を行った。さらに、利用者サービスを向上させるために、主題専門図書館員を配置し、学部との連絡係として利用者の必要に合わせた資料を収集し、利用指導を行うことなどを目的とした主題専門制を開始した (齊藤, 1989)。

この頃から、英国では大学院における図書館学教育が発展し、大学院で図書館学を学んだ図書館員の数が増えたこと、そして大学図書館員のための教育が主題知識を強調したものであったことなどが主題専門制導入の実現を可能にしたとされている (Duino, 1979)。

以上のような1960年代に始まる大学教育の拡大のもとで、大学図書館は主題専門制採用への動向を歩み始めた。主題専門制が成功した例として、East Anglia 大学 (Guttsman, 1973) や Glasgow 大学などがあり、大学図書館の基盤として定着していった。特に Glasgow 大学では主題部門制も採用された (MacKenna, 1980; 齊藤, 1989)。

Parry は1967年に提出した大学図書館の現状と改善に関する報告書において、大学図書館における主題専門図書館員の役割を高く評価し、主題部門制の組織形態を

とらなくても、大学図書館に主題分野専門の図書館員を配置することが必要不可欠であるという意見を述べた (Duino, 1979; 斉藤, 1989)。

こうしてその重要性が認められた主題専門制は、英国の多くの大学図書館で採用されるようになったことを、いくつかの調査結果が示している。すなわち、1972年/73年の調査では、調査した大学図書館38校中、28校がなんらかの主題専門制をとり入れていた。また、1975年の調査でも61図書館のうち主題専門制を全くとっていないのは12館だけであった (Woodhead, *et al.*, 1982)。

しかしその一方で、主題専門制に対する批判もあり、いったん導入した主題専門制を一部修正、縮小する大学図書館が現れた。Sussex大学のように主題専門制が廃止されてしまう例もあった (Davis, 1982)。

いくつかの要因が主題専門制の見直しを余儀なくさせた。たとえば、各分野の主題専門図書館員相互の協力調整が困難であったこと、昇進制度に問題があったことなどである。また、有能な主題専門図書館員が得難いことや、主題専門図書館員とジェネラリスト図書館員との対立など様々な問題があった。さらに1976年に提出された Atkinson 報告は、大学図書館の規模を凍結すべきであるという見解を示し、これによって大学図書館の予算が削減されることになった。そこで、多数の図書館員を必要とする主題専門制は、財政的な問題からその存続が難しくなった。 (Shoham, 1982; Woodhead, *et al.*, 1982)。

このような要因に加え、学問の進歩、情報量の増大といった環境の変化が、主題専門制自体に問題を投げかけた。つまり学問の急速な進歩で分野が細分化されるにつれて、これまでの主題専門制の対応では利用者の高度な要求を満足させることが難しくなってきた。一方、情報量が急激に増加してきたために、その中から必要な情報をいかに効率的に見つけ出すかという情報学の知識が図書館員にとって不可欠なものとなってきた。そこでこれまでのような主題専門図書館員が、これからの図書館サービスに真に必要なかが問われ、主題専門制を再検討する必要性が強調された (斉藤, 1989)。

### III. 主題専門図書館員

前章の、「主題部門制と主題専門制の歴史的推移」の中で、大学図書館に主題専門図書館員が配置されるようになった過程を概観した。本章では主題専門図書館員の

役割とその変遷を中心にみることにする。

主題専門図書館員とは、一般にある特定の主題もしくは学問分野の専門的知識を有する図書館員を意味する。米国の大学図書館では主題部門制が採用されると、多くの場合各部門ごとに主題専門図書館員が配置された。ALA 図書館情報学事典によると、主題専門〔図書館〕員の定義として、『ある主題もしくは学問分野に秀でた知識を有する図書館スタッフの一員で、当該主題領域における図書館資料の選択と評価に責任を有すると共に、ときには当該主題領域における情報サービスと資料の書誌的組織化にも責任を負うことがある』としている。

英国の大学図書館では、主題別に組織化された図書館員、すなわち主題専門図書館員が図書館サービスに重要な役割を果たす主題専門制を採用した。主題専門制の発展について概観した Woodhead (Woodhead, 1974) は、主題専門図書館員とは、ある特定の主題分野における一つもしくは複数の図書館サービスを発展させるために任命された図書館スタッフを言うとして定義している。しかし、その後 Woodhead と Martin (Woodhead, *et al.*, 1982) が 1981 年に行った英国の大学図書館における主題専門制の調査において、主題専門図書館員に対する統一された定義はなく、大学により様々な定義がされており、その役割や地位も異なることを見出した。またその名称も、一般的には subject specialist, subject librarian と呼ばれているが、Woodhead らの行った調査によると、その他にも liaison officer, subject assistant, subject consultant, liaison librarian などの名称が用いられていることがわかった。

主題専門図書館員の名称やその役割・地位が様々であるように、どのような資格をもっていなければならないかということに関しても、統一された基準はなかった。国により、また年代により様々な基準が用いられていたようである。たとえば、1960年代から70年代にかけて、ドイツの大学図書館におかれた Fachreferenten と呼ばれる主題専門家には、非常に高い基準が設けられていた。まず、主題分野の博士号をもっていることが要求され、学術図書館での1,2年の実地経験、数ヶ国語の知識が必要であった。さらに国家試験に合格することが義務づけられていた (Danton, 1967)。一方、当時の英米の図書館における主題専門図書館員は、それほど厳しい基準が設けられていたわけではなかった。一般に図書館員としての教育を受け、主題分野の学士または修士号をもつ者とされたが、主題分野の学位は、実際の仕事での経

験を通して得られた主題についての専門知識によって代替可能であった (Coppin, 1974)。

Russell Duino (Duino, 1979) は、米国と英国の大学図書館における主題専門図書館員の役割について比較を行っている。彼は①教職員とのリエゾン、②選書、③レファレンス、④目録作成の4つの図書館機能における主題専門図書館員の役割を調査し、a. 大学教育の歴史、b. 図書館教育の歴史、c. 主題専門図書館員の教育の3つの観点から解説を加えている。その結果、次のように米国と英国の対比をしている。

・米国

1. 300以上の大学 (博士課程のレベル)
2. ドイツを模範とした100年以上の大学教育の伝統
3. 大学院における図書館学教育の長い伝統
4. すべての館種の図書館員教育は図書館機能を強調
5. 大学図書館における主題専門制採用への動向はみられない

・英国

1. 45の大学
2. 大学院教育の歴史は比較的短い
3. 大学院における図書館学教育の近年になっての発展
4. 大学図書館員の教育は主題知識を強調
5. (45大学のうち20の大学の) 大学図書館において主題専門制採用への明確な動向がみられる

上記の比較から、英国の図書館教育における主題志向は、主題専門制への動向を導いた主要な要因であるという仮説を導きだしている (Duino, 1979)。

次に、英国の大学図書館で主題専門制が定着していった当時の主題専門図書館員の役割と、その変遷を示すことにする。主題専門図書館員は、主題分野と図書館学の両方の知識を持ち、図書館員という職務の中で一つの主題分野の責任を有する者、ある特定の主題分野についての一つないし複数の図書館サービスを遂行するために任命された者であった (Humphreys, 1967; Holbrook, 1972; Woodhead, 1974)。すなわち、主題専門図書館員は担当する主題分野を中心とし、時にはその近隣分野を含めて (Woodhead, 1974)、教職員とのリエゾン、利用者教育、選書及び蔵書構築、レファレンス、分類・目録作成などを行う役割を担っていた (Duino, 1979; Woodhead, *et al.*, 1982)。このような役割に要求された主題知識は非常に高度で専門的な研究者としての知識ではなく、あくまで図書館員として主題分野のサービスを担当するための基礎的な主題知識であった (Guttsman,

1973)。

しかし、その後英国の大学図書館に情報サービスが導入され拡大されてくると、主題専門図書館員に対する期待も徐々に変化していった。1960年代後半からいくつかの大学図書館で、教員や大学院生に情報の利用指導、データベースの紹介、及びカレント・アウェアネス・サービスを行うなど情報サービスの浸透を促進するために information officer が採用され始めた (Neway, 1985)。

大学図書館における情報サービスは、多くの場合、主題専門図書館員や、新たに採用された主題専門の information officer が行っていた。情報サービスを提供する図書館員は、対象となる主題分野の専門的な知識を持ち、同時に図書館学と新たに情報管理の技術や知識を持つことが必要とされ、さらに積極性と社交性も望まれた (Corney, 1969)。

このような情報サービスに要求された主題知識は、これまでの主題専門図書館員に要求されていた主題知識よりも、より専門的なものであった (斉藤, 1989)。すなわち、あくまで図書館員として担当主題分野の基礎的な知識と幅広い図書館学の知識をもって、主題分野についての図書館サービスを遂行するこれまでの主題専門図書館員の役割とは異なるものであった。斉藤 (斉藤, 1989) は、情報サービスを提供する主題情報の専門家として、『直接利用者の要求に応えるだけでなく、その主題分野の情報の範囲、性格、利用形態などに関する知識をその情報の収集、処理、加工、検索などの技術に反映させていく』役割を担うものであると述べている。

こうして、英国の大学図書館における主題専門図書館員は、主題専門制の導入、定着期から情報サービスの発展という変遷とともに、求められる役割も変わっていった。

#### IV. 主題専門図書館員養成のための教育

前章で、主題専門図書館員の役割とその変遷をみてきたが、この章では、このような特定の主題に精通した主題専門図書館員を養成するための教育システムである主題専門教育についてみてゆく。主題専門教育には、ライブラリー・スクールの中で行われるものと、専門職団体により提供されるものがある。前者については、subject specialty programs, subject speciality courses (Lemke, 1978), subject specialization (Williams, *et al.*, 1986) などの名称で呼ばれている。

### A. 主題専門教育の歴史的推移

欧米の図書館・情報学教育において、主題専門図書館員を養成するための主題専門教育は、比較的長い歴史をもって継続されている。米国の主題専門教育に関しては、WilliamsとZachert (Williams, *et al.*, 1986) がその歴史的推移をレビューしかつ最近の傾向や問題点にも言及している。

主題専門図書館員の教育は、主題分野の教育と図書館学の教育が必ずしもいっしょに行われていたわけではなかった。すなわち、主題分野の学士、修士、または博士号をとり、なおかつ図書館学の教育を受け図書館での経験をもつというものであった (Danton, 1967; Coppin, 1974, Woodhead, *et al.*, 1982)。

しかし、米国のライブラリー・スクールでは、比較的早くから主題専門教育が必要であると考えられており、1913年には「Specialization and Grading in Library School」というタイトルで、Mary W. Plummerにより主題専門教育に関する文献が *ALA Bulletin* に掲載された (Williams, *et al.*, 1986)。しかし、Williamsonは1918年、ライブラリー・スクールでの主題専門教育は充分に行われていないことを指摘した (Williams, *et al.*, 1986)。1927年、Special Library Association (SLA) はすべての大学図書館のトレーニング・プログラムとして主題専門教育の最低基準 (Minimum Standards) を発表した。しかし、この頃から主題専門教育に対する問題点も出てきた。つまり、技術としてのライブラリー・エコノミーに焦点をおくライブラリー・スクールの発展は、研究者としての図書館員の伝統を変化させる結果となった (Williams, *et al.*, 1986)。

SLAのトレーニング委員会は1936年、700人の専門図書館員に対し調査を行った。その結果、回答者の50%近くが何らかのライブラリー・スクールのコースを履修しているが、多くがそれらに失望していた。また、すべての回答者が、主題専門教育の必要性を確信しており、そのためのもっと多くのコースを望んでいた (Williams, *et al.*, 1986)。

1946年、SLAのRobert B. Downsは、主題専門図書館員のトレーニングを提唱し、ライブラリー・スクールにおける特別のプログラムを推薦した。Downsの計画は、ライブラリー・スクールでのコースや他の主題分野でのコースと実習 (インターンシップ) を組み合わせたものであった。このインターンは、学部図書館または専門図書館で有給のアシスタントとして仕事をするもの

であった。そして卒業後、適切な給与レベルでの雇用が保証されていた (Duino, 1979)。

Downsは主題専門図書館員のトレーニングの必要性を強調すると同時に、主題部門制の発展について述べた。図書館の主題部門を担当する図書館員は、専門主題と図書館技術の両方について教育を受けることが期待されていた (Duino, 1979)。

また1946年のJ. Periam Dantonの報告書によると、彼は修士課程レベルでの適切なコースを有した主題専門教育プログラムを推薦した。このように主題専門教育の提唱が盛んに行われ、1950年代の終わりまでに、かなり定着したように思われた (Williams, *et al.*, 1986)。

1971年、Louisiana州立大学のRichard H. Dillonは、大学図書館や大規模公共図書館における主題専門家 (subject specialist scholars) の必要性とその教育の問題点について次のように述べている。『もし我々の知っていることの全てが内容でなくオペレーションやテクニックであったら、我々は歴史学や英語学の著名な教授達と対等に受け入れられることが可能であろうか。問題は、図書館学教育哲学の誤った理想である。すなわち、我々は学生が卒業時に多くの主題領域の「ジェネラリスト」となるような教育はできる……我々は多くの主題領域について無知でなまかじりの知識をもった若い図書館員を生みだしており、専門的知識をもった者は全く生みだしていない』 (Duino, 1979)。

Dillonによると、その解決策はライブラリー・スクールにおける主題専門図書館員のトレーニングであり、さらにもっと重要なのは、短期の補充コースやセミナーによる継続教育のシステムであるとしている。さらにこのような継続教育を受けるための長期休暇や勤務時間の短縮を認める必要があるとしている。Dillonはさらに、図書館員は経営管理の能力よりも専門主題の基礎やさらに専門知識を向上させることを行うべきであると述べている (Duino, 1979)。

1960年代から1970年代にかけて、徐々に受け入れられてきた情報学のカリキュラムの浸透が進んだ。そして1970年代から1980年代の初めにかけて、コンピュータ・サイエンスと密接に関連した新しい教育プログラムが現れた。ライブラリー・スクールのカリキュラムは新しい情報学のコースへと変化していったが、それらは図書館プロセスの機械化やオンライン検索などのコースに限られていた。すなわち、ライブラリー・スクールではinformation professionのほんの一部しか扱っていない



かった。その証拠に、情報専門家のためのトレーニングの必要性を研究した Organization for Economic Cooperation and Development (OECD) による 1973 年の調査や、情報システム専門家のカリキュラムに関する 1977 年の研究においても、図書館員や図書館教育に関しては全く触れられていなかった (Williams, *et al.*, 1986)。

Williams と Zachert (Williams, *et al.*, 1986) は、information profession としてライブラリー・スクールが提供できるものは、主題専門図書館員のトレーニングであると述べている。しかしそのトレーニングは、彼らが主題情報サービスを提供するために必要な知識のほんのさわりだけしか扱っていないと指摘している。

そのような状況の中で、保健科学図書館員と法律図書館員は、彼らがそれぞれの分野で専門家として活躍していくための継続教育を設計し自らの資格を発展させていった (Cohen, 1963; Roper, 1979)。従って、図書館教育はこれらの分野の専門家を養成することができたようにみえた。しかし、それは彼らが彼らの必要性に適した教育援助システムを自ら構築していったことによる功績が大きい。このような主題専門図書館員は独自の専門職団体を組織していった一方で、ALA のようないわゆる一般的な図書館団体やライブラリー・スクールの認定制度には常に失望していた (Koenig, 1983; Williams, *et al.*, 1986)。

## B. 現在の主題専門教育

次に、主題専門教育が、現在どのような形で提供されているかを述べる。まず、主題専門教育には具体的にどのような主題内容のコースが含まれているのかを、1977 年に Antje B. Lemke が米国の ALA 認定ライブラリー・スクールを対象に行った調査 (Lemke, 1978) で用いた区分に従って示すことにする。

まず、主題専門教育に含まれる主題の領域として：

- a. 図書館・情報学以外の学問 (主題) 分野に関するコース  
例) 音楽, 医学, 法学
- b. 正規の学問分野になっていない, 広義の図書館・情報学分野に含まれる領域に関するコース  
例) 保存文書 (Archives), 出版  
貴重書 (Rare Books)
- c. 社会的関心事, 社会的問題となっている新しい領域に関するコース

例) 老年学, 新都市サービス・プログラム

がある。

一方 Lemke (Lemke, 1978) によれば、次のような領域は、主題専門教育には含まれないとされている。

- d. 館種別図書館に関するコース  
例) 公共図書館, 学校図書館
- e. 視聴覚資料 (メディア) に関するコース  
例) フィルム, 録音物
- f. 図書館における経営管理, コンピュータ利用に関するコース  
例) 図書館経営, コンピュータ情報検索システム

## 1. 米国の主題専門教育

はじめに、米国の現在の図書館・情報学教育の中で、どのような種類の主題専門教育が行われているかをみる。大別して、(A) 大学 (ライブラリー・スクール) の正規の教育として行われるものと、(B) 専門職団体によるものがある。(A) の大学 (ライブラリー・スクール) の正規の教育として行われるものは、さらに

- ① 図書館・情報学と主題分野との複合学位システム
- ② 主題分野専攻コース
- ③ 選択科目としての主題専門科目

の 3 つに分けられる。①の複合学位システムは、図書館・情報学と主題分野の両方の修士の学位を同時に取得することができる制度であるが、これについては、第 V 章で詳しく述べる。②の主題分野専攻コースは、すでに主題分野の修士の学位をもっている者が多く履修するプログラムで、このコースで取得できる学位は図書館・情報学における修士の学位のみとされるが、主題専門教育として充実した内容を有するものが多い。③の主題専門科目は、ライブラリー・スクールの卒業所要単位の中に含まれる、特定の主題分野を扱った 1 つか 2 つの選択科目である (加藤, 1991a)。

これらの主題専門教育プログラムの提供者 (担当者) は、次の 5 のタイプに分けられる (Lemke, 1978)。

- a. ライブラリー・スクールの専任スタッフが担当
- b. ライブラリー・スクールの兼任, 非常勤スタッフが担当 (実務経験者が多い)
- c. 専門主題の学部とライブラリー・スクールの提携により提供
- d. 専門主題の学部のカリキュラムに含まれるが、ライブラリー・スクールの学生は選択科目または特殊科目として受講可

## 大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育

### e. カリキュラム以外の特別セミナーとして提供

このうち、上記①の「図書館・情報学と主題分野との複合学位システム」と②の「主題分野専攻コース」は、ほとんど c. の専門主題の学部とライブラリー・スクールの提携により提供されている（加藤，1991a）。

(B) の専門職団体によるものとしては、米国医学図書館協会 (MLA) の継続教育システムが有名である。これは、20 年の歴史をもち年間 30 種のコースを実施、単位を与え終了証をだすというものである。その多くは MLA の年次大会の際に開催される。1991 年度のコースは、①図書館の管理運営、②コンピュータ、③情報サービス、④医学の四つのグループに分けられ、特に臨床医学文献の読み方というコースが新設された。MLA ではこの継続教育コースにおける単位と大学の正規の教育、経験年数などを考慮して、独自の専門医学図書館員の認定制度を設けている（野添，1991）。

## 2. ドイツの主題専門教育

次にドイツ（旧西ドイツ）の主題専門教育を概観する。ドイツの図書館・情報学教育は、専門の図書館学校または図書館単科大学で行われているが、州により学校システムや教育レベルがかなり異なる。司書資格には大きく分けて 3 つのレベルがあり、

### ①学術司書

②司書（学術図書館の司書、公共図書館の司書の 2 分野に分かれる）

### ③司書補

の順となっている。各図書館学校または図書館単科大学により取得可能な資格は異なる（Wattenberg，1990）。

主題専門教育と言うべきものをいくつかあげると、まず①の学術司書に関しては、プログラムの受講資格として、正規の大学課程終了と一つの主題分野での学位（修士または博士号）取得が前提となる。そこで、学術司書の資格を取得する前に、すでにある主題分野の専門知識を有していることが必要になる。次に②の司書のプログラムであるが、これにはいくつかの主題分野のための専門教育がある。たとえば、Stuttgart 図書館単科大学の音楽図書館学専攻コース（Leale，1978；Nein，1986；加藤，1991a）、Ulm 大学の医学ドキュメンタリスト養成コース、Hannover 単科大学図書館情報学科のバイオサイエンス専門ドキュメンタリスト養成コースなどである。また、Ulm と Hannover の主題専門コースは③の司書補の養成も行っている（Laux，1990）。

このような大学における教育の他に、専門職団体による主題専門教育も行われている。たとえば、Gesellschaft für Bibliothekswesen und Dokumentation des Landbaus (Association for Librarianship and Documentation in Agriculture and Forestry) では、農学分野の専門のトレーニングを提供している（Laux，1990）。

## 3. 英国の主題専門教育

英国においては、1970 年代後半から、従来あった主題専門教育（たとえば音楽分野の主題専門教育など）は徐々に縮小されていった（Miller，1983；加藤，1991a）。その理由として、この頃から文教予算削減のあおりを受け、図書館・情報学教育への資金援助が減少したこと、かつて盛んに取り入れられた主題専門制に代わり、情報サービスの拡大が大学図書館を中心に行われ始めたこと、そしてライブラリー・スクールに情報学や情報管理のコースが開設され始めたことなどがあげられる（斉藤，1989）。

最近英国では、図書館・情報学教育における専門化が進む傾向にあるとされている（Moore，1990）。先に述べた Lemke（Lemke，1978）の区分によると、これは主題専門教育とは言えないが、現在、専門教育の二つの新しいマーケットとして注目されている領域に、学校図書館と情報管理があげられている。また、すでに図書館・情報関連職種で仕事をしている人々を対象とした継続教育やトレーニングが拡大する傾向にある（Moore，1990）。

## C. 分野別主題専門図書館員とその教育

次に、主題分野別に専門図書館員とその教育について言及した文献をいくつかあげる。

### 1. 音楽分野

Bradford Young（Young，1984）は米国における音楽分野の主題専門教育について、その歴史的推移と現在の教育について述べている。音楽分野の主題専門教育がはじめて言及されたのは、米国の音楽図書館学の創始者の一人である Otto Kiinkeldey が、音楽図書館員のトレーニングに関する文献を *ALA Bulletin* に発表した 1937 年であった。1947 年に、Music Library Association (MLA) のカリキュラム委員会 (The Committee on Curricula) は①研究図書館員（音楽図書館管理者）と②サービス担当図書館員（音楽図書館アシスタント）の 2

つのタイプの音楽図書館員を養成することを提案した。翌 1948 年には、Chicago 大学において、大学院レベルでの音楽図書館学コースが設置され、修士の学位が認められたことが報告された。1970 年代に入り、音楽分野の主題専門教育において、音楽学（音楽史）と図書館学の複合学位システムが採用された（Young, 1984）。

1974 年、MLA の専門教育委員会（The Committee on Professional Education）は、音楽図書館員の資格に関する文書（Qualifications of Music Librarian）を提出した。文書の内容は、

- I. 音楽図書館資料の知識
- II. 最も重要な音楽図書館の業務を遂行する能力
- III. 経歴
- IV. 結論：音楽図書館員の教育

の 4 章からなっており、特に IV. の結論では次のようにまとめている。

- A. 音楽の知識、経歴をもっていることが必要。音楽学士（B. A.）さらには音楽学修士（M. A.）の学位をもっていることが望ましい。
- B. しかし、多くの音楽図書館員は上記 A の資格をもっていない。現在は、認定校における図書館学の修士の学位をもっていることが、多くのポストに要求される。
- C. 現在、多くのライブラリー・スクールで、音楽図書館学のコースが開かれているのは、たいへん望ましい。
- D. 音楽図書館での実習、インターンシップはたいへん価値あるものである。
- E. 外国語（特にドイツ語、イタリア語、フランス語、ラテン語）に精通することが有用である。
- F. MLA などの専門職団体に加盟し、研修を続けることが有用である。

主題専門教育が行われている分野で、主題専門員の資格に関する文書が作成されたのは、音楽分野がはじめてのことである。この文書は音楽図書館関係だけでなく、いくつかの図書館学の雑誌にも転載され、特に図書館学教育者の関心を得たり、他の主題分野の模範とされた（Young, 1984）。

次に、音楽分野の主題専門教育が、現在どのような形で提供されているかを述べる。現在、米国の 11 のライブラリー・スクールが音楽分野の主題専門教育を正規のプログラムとして有している。これらのプログラムは、

- ① 図書館・情報学と音楽学（または音楽史）との複合

学位システム

- ② 音楽図書館学または音楽図書館・情報学専攻コース
- ③ 選択科目としての音楽図書館学

の 3 つのタイプに分けることができる（加藤, 1991a）。

米国では、1985 年現在で、年平均 70 名が音楽分野の主題専門教育を受講しており、そのうち約 40 名が音楽図書館員となることを希望している。そのうち毎年 20～25 名が職を得ている。中でも上記の①のタイプの複合学位システムの受講生は、就職率がよいとされている（Roberts, 1985）

## 2. 経営学分野

Aubrey Kendrick (Kendrick, 1989) は米国の大学図書館の経営学専門図書館員の学歴と職歴（経験）について言及している。彼は、1986 年に経営学科（ビジネス・スクール）を有する大学の大学図書館で仕事をする経営学専門図書館員 310 名を対象とした質問紙調査を行い、有効回答数 162 を得た。それによると、まず経営学専門図書館員の学歴として、学部での専攻は多種多様であるが、28% が MBA の学位をもっている。職歴および経験は、図書館員としての経験が 6～15 年、経営学分野の図書館員の経験が 1～6 年、そして現在のポジションにおける経験が 1～4 年というのが最も多い。多くの者は、図書館員となった当初は、一般のレファレンスまたは社会科学分野のレファレンスなどを担当し、数年後、経営学分野の専門図書館員となる。35.8% は経営学専門図書館員となることを希望している一方で、61.7% は他にポジションがなかったからなどの理由で、偶発的に経営学専門図書館員となっている。しかし、53% の者は、経営学図書館学のキャリアを得るために、専門知識を発展させたいと考えている。そして多くの経営学専門図書館員は、専門分野の知識をさらに得るために、いくつかの主題専門コースを履修している。Kendrick は、調査結果から、主題専門図書館員は、図書館・情報学の教育に加えて、主題分野の知識を必要としていると述べている。

その他に、Kathering Cveljo (Cveljo, 1979) も経営学図書館員の教育について言及している。

## 3. その他の主題分野

F. W. Lancaster (Lancaster, 1985) は、農学分野の情報サービスという観点から、主題専門家のトレーニングについて述べている。彼は農学情報専門家の教育の適

切なプログラムの欠如を指摘しており、情報専門家と農学分野の主題専門家の相互関係を改善するにあたっては、大きな障害があると述べている。

次に、Miriam Tees (Tees, 1986) は、専門図書館の図書館員は非常に重要な知識（学歴）やスキルを何であると考えているのかを、SLA のメンバー 852 名を対象に質問紙調査を行った。有効回答数 472 (55.4%) を得た。その結果、主題分野の学位については、博士号が必要またはたいへん有用であるとの回答は 3.4% で、74% は必要ないとしている。次に修士号が必要またはたいへん有用であるとの回答は 42%、学士号が必要としたのは 60.9% であった。そして 74% が主題分野での経験が必要であると回答している。これらの調査結果から、Tees は有能な主題専門図書館員になるためには、主題分野の知識（学歴）とそれに適した主題分野での仕事（業務）の経験が必要であると述べている。

また、Doris Geers (Geers, 1987) らは、主題専門教育は、どの程度、図書館員やドキュメンテーション・スペシャリストにとって有用なのかを述べている。

## V. 主題専門教育としての複合学位システム

第 IV 章、B 節で、現在行われている主題専門教育のタイプをいくつかあげた。ここではその中から米国の複合学位システムについてとりあげ、主題専門教育としての可能性を検討する。

### A. 複合学位システムの概要

複合学位システムとは、図書館・情報学と他の主題分野の学位を同時に取得することができるようにした制度で、2 つの学位を個別に取得する場合よりも、必要単位数を若干減らしてある。1970 年代初期から米国のライブラリー・スクールで採用され始めた（宮部，1990）。

この複合学位システムの名称は、大学により様々な呼び方がされており、たとえば、Joint-Degree Program, Dual Master's Degree Program, Combined Degree System などと呼ばれている（加藤，1991a）。わが国でも定着した訳語はなく、米国の図書館学教育に関する邦語文献では、複合学位システム（長澤，1986；宮部，1990）とか複数学位取得プログラム（山本，1992）という訳語が用いられている。

複合学位システムの採用校の数は一定しておらず、毎年いくらかの増減がある。複合学位システムの実態について調査したものには、Maurice P. Marchant と Ca-

rolyn F. Wilson (Marchant, *et al.*, 1983) の文献がある。それによるも 1983 年現在で、ALA 認定校のうち 25 校が、主として修士レベルで 1 つあるいは複数の複合学位システムを採用している。およそ 20 の主題分野がその対象となっているが、中でも特に、歴史、法律、経営などが多く、次いで教育、保存文書、地域研究、音楽、美術、英語などの人文系が多い。

ALA Yearbook においても 1989 年版から〈Education, Library〉の項目において複合学位の採用校の数を明記している。それによると 1988 年現在では、ALA 認定校 60 校のうち 32 校が (Van Orden, 1989), 1989 年現在では、ALA 認定校 59 校のうち 28 校が複合学位システムを採用しているとなっている (Van Orden, 1990)。

第 1 表 複合学位の対象となっている分野と採用校の数  
出典：加藤修子：主題専門教育としての複合学位システム、三田図書館・情報学会 1991 年度研究大会予稿集、1991、p. 32. をもとに加筆をした。

複合学位対象分野	採用校数
History	13 校
Law	7
Music	6
Business Administration	5
Area Studies	5
English	4
Art History	3
Geography	2
Divinity	2
Education	2
History and Philosophy of Science	1
Religious Studies	1
Greek and/or Latin	1
Social Science	1
Public Affairs	1
Journalism	1
Urban Affairs	1
Instructional Technology	1
Public Administration	1
Government and Politics	1
Information and Computer Science	1
System Science	1
Chemistry	1
Pharmaceutical Sciences	1

注) ALA 認定校の最新の大学要覧からデータを得た。

加藤修子 (加藤, 1991b) は 1991 年に、ライブラリー・スクールの最新の大学要覧から複合学位システムについて調査した。その結果、ALA 認定校のうち 21 校が、主として修士レベルで 1~7 つの複合学位システムを採用している。この制度をもつほとんどのライブラリー・スクールが、同じ大学内にある専門主題の学部や学科と提携してプログラムを実施しているが、中には他の大学の専門主題の学部、学科と提携している例もある。学生は、ライブラリー・スクールと専門主題の学部両方の入学手続きをし、両方の受講生となったところで、複合学位システムが開始される (加藤, 1991a)。

1991 年現在に在る複合学位の対象となっている分野と、その分野との複合学位システムを採用しているライブラリー・スクールの数を第 1 表に示す (加藤, 1991b)。およそ 24 の主題分野がその対象となっているが、中でも歴史、法学、音楽、経営、地域研究などが多く、次いで英語、美術、地理、神学、教育などの人文・社会学系が多い。これは 1983 年の Marchant と Wilson の調査結果 (Marchant, *et al.*, 1983) とほぼ同様である。しかし数は少ないが、情報・コンピュータ科学、システム科学、化学、薬学といった自然科学分野もみうけられる。

主題分野での取得学位は修士がほとんどであるが、中には、法律の分野のように主題分野の博士課程と図書館・情報学の修士課程で提携をしている例がある (加藤, 1991b)。

## B. 複合学位システムの問題点

現在複合学位システムにおいて最も大きな問題点とされているのは、単位数減少に関して、統一された基準が確立されていないことである。他の主題分野の単位を取得するために、図書館・情報学の単位を減らし過ぎると、図書館員としての専門性に欠ける恐れがあるとの見解もある (長澤, 1986)。また、プログラム構成や修了期限についても大学により差があり、また提携する主題分野によってもかなり異なる (加藤, 1991a)。

単位数減少に関して、具体的に、どの程度の幅があるのか、また平均的な単位数はどのくらいなのかを、第 2 表に示す。これは、Marchant と Wilson (Marchant, *et al.*, 1983) による 1983 年現在の調査結果における数値をもとに表にまとめたものである (加藤, 1991a)。図書館・情報学では必要単位数が 26~37 単位となっており、平均すると 30 単位である。一方、他の主題分野では 9~37 単位とかなりの幅があることがわかる。そし

第 2 表 複合学位システムにおける単位数の幅と平均値  
出典: 加藤修子. 図書館・情報学教育における主題専門教育: アメリカにおける音楽分野の主題専門教育を中心に. 図書館学会年報. Vol. 37, No. 3, 1991. p. 129.

Marchant, Maurice P.; Wilson, Carolyn F. Developing Joint Graduate Programs for Librarians. *Journal of Education for Librarianship*. Vol. 24, No. 1, p. 30-37 (1983) における数値をもとに表を作成した。

	必要単位数の幅	必要単位数の平均
図書館・情報学	26~37	30
他の主題分野	9~37	27
複合学位	39~74	

  

減少単位数の幅	減少単位数の平均
0~16	8~10

て、複合学位となり必要単位数が総合されると、39~74 単位と大学によりまた主題分野により、かなりの開きができることがわかる。減少単位数は、複合学位で大学により 0~16 単位の幅があり、平均すると 8~10 単位の減少が行われている。

以上、複合学位システムの問題点をあげたが、現段階では、大学によりそのプログラムの提供の仕方にかかなりの差があることがみうけられる。

## C. 主題専門教育としての複合学位システムの評価

主題専門教育としての複合学位システムを、ライブラリー・スクールの「選択科目としておかれている主題専門科目」と比較して検討してみることにする。

*Library Trends*, Vol. 34, No. 4 (1986) の「特集: 図書館情報学教育における最近および将来の動向」の中でも、主題専門教育について「選択科目としての主題専門科目」と「複合学位システム」を比較して言及している。それによると、選択科目としてある主題専門教育に対しては、主題専門図書館員の養成として充分ではないとの意見がある。すなわち、これはライブラリー・スクールの 36 単位の中でのプログラムであり、1 つか 2 つの選択科目を受講しただけでは、十分な主題専門性はカバーできないという批判がなされている。そして、このようなプログラムの今後の発展には問題があるとされている (Robbins-Carter, *et al.*, 1986)。

大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育

選択科目としての主題専門科目には、その他にもいくつかの問題点がある。まず、受講資格はほとんど限定されていない。受講生の中には主題分野の学士号もっている者もいるであろうが、主題に対するある程度の知識があれば、たいていは受講を許可されてしまう。また、主題専門の科目を選択科目として受講したとしても、それで得た主題分野の専門知識は一定の資格（たとえば修士、学士などの学位）として証明されるわけではない。確かに、1つか2つの選択科目としての主題専門科目を受講しただけでは、実際、特定の主題に精通した主題専門図書館員になることは無理であろう（加藤，1991a）。

これに対して、「複合学位システム」は、主題専門図書館員養成のためのプログラムとして肯定的に受けとめられている。すなわち、主題専門教育として一応妥当なカリキュラム内容を含み、学生が主題専門図書館員となる

ための準備として適切なプログラムであるという見解が多くを占める（Robbins-Carter, *et al.*, 1986）。

複合学位システムのカリキュラムの例を第3表（3-1, 3-2, 及び 3-3）に示す（加藤，1991b; 加藤，1992）。それぞれ、New York 州立大学 Buffalo 校 1988-90 年度の図書館・情報学と音楽史との複合学位プログラム、New York 州立大学 Albany 校 1989 年度の図書館・情報学と歴史学（ヨーロッパ史）との複合学位プログラム、及び Saint John's 大学 1990-92 年度の図書館・情報学と薬学との複合学位プログラムである。これらの例からもわかるように、図書館・情報学と主題分野において、それぞれ一定の科目数ならびに単位数をとることが定められており、充実したカリキュラムであると考えられる。従って、主題分野に精通した専門の図書館員を養成することが充分可能なプログラムであると思われる。

第3-1表 複合学位システムのカリキュラム例

New York 州立大学 Buffalo 校 1988—90 年度の図書館・情報学と音楽史との複合学位プログラム

出典：加藤修子，図書館・情報学教育における音楽分野の主題専門教育，音楽図書館協議会 20 周年記念論文集，1993 年 4 月刊行予定。

	必修科目	選択科目
図書館・ 情報学  36単位  取得学位 MS	図書館・情報学概論** (3) 参考業務と情報源** (3) 記録情報の組織と管理 I ** (3) 記録情報の組織と管理 II (3) 図書館及び情報提供機関の経営** (3) 音楽図書館学 I * (3) 音楽図書館学 II * (3) 修士論文のための研究過程* (1-6) 音楽図書館学における実習* (1-3)	情報処理とシステム分析 情報検索と情報サービス 図書館史とメディアの変遷 調査研究法 公共図書館または大学図書館及び研究図書館
音楽史  30単位 以上  取得学位 MA	必修科目 音楽史（4コース選択） 音楽書誌学 記譜法 (4) 修士論文 (7) 外国語（ドイツ語+その他の外国語）	選択科目 音楽史における調査研究 （音楽図像学に関する）
受講資格	学部での音楽専攻が望ましい	

注) \* 複合学位必修科目

\*\* コアカリキュラム

1988—1990 年度大学要覧による

第 3-2 表

New York 州立大学 Albany 校 1989 年度の図書館・情報学と  
歴史学（ヨーロッパ史）との複合学位プログラム  
出典：加藤修子，主題専門教育としての複合学位システム，三田図書館・  
情報学会 1991 年度研究大会予稿集，1991，p. 34.

	必修科目	選択科目
図書館・ 情報学  29単位 (min. 28)  取得学位 MLS	情報環境 (3)	図書館・情報ネットワーク (3)
	情報処理 (3)	記録情報管理 (2)
	情報源と情報サービス (3)	合衆国政府刊行物 (3)
	情報システムと技術の応用 (3)	
	—調査研究法 (2)—**	
	—情報人口の分析（統計） (1)—	
	研究セミナー (3)	
	社会学の情報源* (3)	
	図書と印刷技術の歴史* (3)	
歴史学  24単位  取得学位 MA	歴史講読 (4)	フランス革命とナポレオン (3)
	(ヨーロッパ知識文化史講読)	1793 年以降の大英帝国と英連邦 (3)
	歴史セミナー（ヨーロッパ史セミナー） (4)	東欧の歴史 (3)
	歴史学における調査研究** (4)	
	ヨーロッパ社会史に関する小論文* (3)	
受講資格	学部での歴史学専攻が望ましい	

注) \* 複合学位必修科目 1989 年度大学要覧による

\*\* 歴史学の「歴史学における調査研究」が図書館・情報学の必修である「調査研究法」と「情報人口の分析（統計）」に相当する

また，表中 \*印のついた科目は，複合学位必修科目で，本来は図書館・情報学または主題分野の選択科目であるが，複合学位となった場合には必修となる科目である。

これらの複合学位必修科目を受講することで，主題分野と図書館・情報学のコースをより関連づけた形で同時に学ぶことができるわけである。

以上のことから，主題専門教育としての複合学位システムの優れている点として，

① 受講資格として，多くの場合，主題分野の学士の学位が要求されている。

② 複合学位システム修了後，主題分野の専門知識を修士（または博士）という学位で証明できる。

③ 主題分野と図書館・情報学のコースを充実したカリキュラムで，より関連づけた形で提供することができる。

などをあげることができる。

この他にも，複合学位システムの利点としては，就職に際しての評価が高いことである。アメリカの Association of Research Libraries 所属の図書館長を対象とした複合学位取得者に関する調査結果によると，MLS のみの取得者よりも優先するという答えや，2 つの学位を個別に取得する場合と同等に評価するという意見が多くを占めている (Marchant, *et al.*, 1983)。

また，受講する学生にとっての利点は，2 つの学位を個別に取得するよりも，短い期間で，少ない授業料で取得できることや，就職に際しての評価が全般的に高いことなどである (加藤，1991b)。

## VI. 日本における主題専門図書館員事情

前章までに，欧米での主題専門図書館員と主題専門教

大学図書館における主題専門図書館員と主題専門教育

第 3-3 表

Saint John's 学 1990—1992 年度の図書館・情報学と薬学との  
複合学位プログラム

出典：加藤修子，主題専門教育としての複合学位システム，三田図書館・  
情報学会 1991 年度研究大会予稿集，1991，p. 34.

	必修科目	選択科目
図書館・ 情報学  33単位  取得学位 MLS	資料組織法概論 (3)	政府機関資料 (3)
	情報学概論 (3)	専門図書館と情報センター (3)
	参考業務と参考図書概論 (3)	システム分析と図書館の機械化 (3)
	情報提供機関の管理 (3)	オンライン・データベース検索と 情報サービス (3)
	索引と抄録作成法* (3)	
	科学技術の情報源* (3)	
	保健科学の文献と図書館学* (3)	
	必修科目	選択科目
薬学  27単位 (min. 24)  取得学位 MS	薬理学と自律神経系 (3)	応用薬理学 (3)
	生物統計学 (3)	薬物乱用の薬理学 (3)
	臨床薬理学 (3)	職業中毒学 (3)
	受容体と薬剤作用のメカニズム (3)	法医中毒学における方法論 (3)
	薬剤情報* (3)	
受講資格	生物科学の基礎知識と学部で薬理学の科目を受講していること	

注)\* 複合学位必修科目

1990—1992 年度大学要覧による

育についてみてきたが、ここでわが国の事情について触れることにする。

図書館・情報学ハンドブックによると、わが国でも1980年以降、大規模大学図書館で主題部門制（主題部門別閲覧室制）が採用され始めたが、業務組織にまで及んだ主題部門制ではなく、多くは開架図書の配架法として採用されているにすぎない。また、主題部門ごとに主題専門図書館員を配置するまでには至っていないことが多いようである。

また、わが国の現在の図書館・情報学教育では、主題専門図書館員の養成制度からも、また雇用体制からも、まだ主題専門教育を論じる段階には至っていないと思われる。しかし、図書館利用者の情報要求に対し、図書館員の主題専門制はある程度必要とされるものであるし、特定主題の知識を必要と感じている図書館員が少なからずいることも確かである。このことは、わが国のいくつかの調査結果からも伺うことができる。例えば、東洋大

学社会学研究所、三浦他、及び樋口の行った3つの調査では、大学図書館員の必要とする知識を調査項目として尋ねているが、その中に主題知識も含まれている。

東洋大学社会学研究所（岩淵ほか，1990）は、1988年に東京都内の国・公立大学図書館（35館）と私立大学図書館（43館）の計78館の図書館で仕事をする専任、臨時、兼任職員1,063名を対象に、大学図書館員が必要としている知識に関する質問紙調査を行った。回収数は244、回収率23.0%であった。この調査では東京都内の公共図書館で働いている職員を対象にして同じ調査が行われた。その結果、特に大学図書館の職員の中に、必要性を感じている知識として、語学、コンピュータに次いで、特定主題とあげている人の割合が高かったことが示されている。

また、三浦逸雄他（三浦ほか，1991a；三浦ほか，1991b）は、1989年に国立、公立、私立大学の図書館（中央館、本館もしくはそれに代わる図書館）489館の統括、関



覧・参考、整理部門の各責任者 3 名、総計 1,467 名を対象に、図書館学教育に関する質問紙調査を行った。回収数は 939、回収率 64.0% であった。調査項目の一つ「大学図書館員に必要な知識・技術」についての質問は、「図書館資料・メディア」「資料組織」「情報・資料利用」「図書館管理」「その他」の 5 つのグループに分けられた 39 種の知識・技術が項目として尋ねられ、「その他」のグループの中に「基礎的な主題知識」と「高度な専門主題知識」の 2 つの項目が含まれている。調査の結果、大学図書館員が必要とする知識・技術の 39 項目の順位において、「基礎的な主題知識」は上位にランクされているが、「高度な専門主題知識」は下位の方であった。「基礎的な主題知識」に関して責任者別の順位をみると、統括責任者よりも他の部門（閲覧・参考、整理、閲覧・整理）の責任者の順位が高くなっている。この調査結果においては、図書館員は主題知識に対して、基礎的な知識は必要であるが、高度な専門知識はそれほど必要とは感じていないようであった（三浦ほか、1991a）。

また、39 種の知識・技術をどこで習得するのが望ましいかについての質問で、「基礎的な主題知識」は、「大学の図書館学教育」「図書館学以外の大学教育」「仕事上で」「自学自習」がそれぞれ 40% を越え、「高度な専門主題知識」に関しては、「図書館学以外の大学教育」が 50% であった。三浦ら（三浦ほか、1991b）はこれらについては、特にどこで習得するかに関して明確な特徴がないと述べている。ただしこれは、資料組織関係、情報・メディア関係、情報・資料利用関係の知識・技術は、明らかに「大学の図書館学教育」で、またコンピュータ関係の知識・技術は「各種研修会、講習会」でそれぞれ習得するとしているのと比較してである。このように、「基礎的な主題知識」は必要度が高いとされているのに、習得機会が明確に表れてこないのは、大学図書館員のための主題知識を得る教育制度の欠如によるところが大きいと思われる。

図書館学教育に対する意見で、資格関係において、各主題別図書館員の資格を設けるという意見をだしたのは 8 名、その他の科目の要求において主題専門知識という意見は 11 名であった（三浦ほか、1991b）。

次に、樋口恵子（樋口、1990）は、大学図書館の将来に関する 3 ラウンド（第 0 ラウンド～第 2 ラウンド）のデルファイ調査を行い、大学図書館分野に精通したパネリストを選出し、最終的に 143 のパネリストの回答を得た。大学図書館員の知識として必要なのは、主題または

専門知識が、語学や最新技術の知識よりも上に挙げられていた。しかし大学図書館の将来像として、主題知識の豊富な質の高い図書館員を多数必要とするようなサービスに対する評価は低く、そのようなサービスの導入時期も遅いと予測されている。

これは、一方で、コンピュータと通信ネットワークを駆使した情報サービスは、適切な設備投資をして必要な情報機器・情報資源を確保できれば導入可能なもので、わが国でも比較的早い時期に普及すると予測されているのに対し、主題専門図書館員を多数必要とするサービスは、そのような専門家の養成制度と雇用体制がわが国では不明瞭であるので、導入時期も見当がつかず評価も低くなったと考えられる。

次に、主題専門図書館員の必要性とそのような人材の養成方法について述べたものに平尾行蔵（平尾、1990）の文献がある。平尾は、情報専門家としての図書館員は今後次の 3 つの類型に分化していくとしている。

- ①情報システムの企画運営を担当する管理者
- ②情報システムを研究し設計し運用する技術者
- ③主題知識をもち情報システムと利用者を仲介する専門家

このうち 3 番目の類型は、情報検索仲介者と主題専門家の 2 つのタイプに分かれる。情報検索仲介者とは、主題に精通し、情報処理システムに明るく、データベースの種類内容と検索方法に詳しい情報専門職員で、このような専門家の教育・研修は、図書館・情報学教育（司書課程ではなく図書館・情報学科での教育）の中で充分可能であるとしている。情報検索仲介者が求める資料・情報に至る方法の専門家であるのに対し、主題専門家とは、求める情報が属する主題の専門家であるとしている。しかし、このような主題専門家の教育・研修は、わが国において社会的制度として実現されていない。つまり、養成制度の面からも雇用体制の面からも図書館員の主題専門家としての地位は存在しないとしている。そこで、主題専門家が図書館に定着するに至るまでの間は、過渡的措置として在職中の者を主題専門家もどきに育てるといった観点から現職教育・研修制度を見直すことを提案している。そして、テクニカルサービス部門の仕事のなかに、主題専門家もどきを育てる契機を見つけることができるとしている。

以上の文献から、わが国においても、主題専門図書館員または図書館員の主題専門知識は必要であるという見解がなされているが、体系化した養成制度が存在しない

ことや、雇用体制がないことが主題専門図書館員の地位を確立することの大きな障害となっていると考えられる。そこで、わが国の図書館・情報学教育において主題専門教育を考える時、まずどのような方法が可能であるかを検討してゆくことが必要であると思われる。

## VII. 主題専門図書館員と主題専門教育の評価と展望

最後に、主題専門図書館員の存在と主題専門教育が、最近の図書館・情報学教育全般の動向の中で、どのように位置づけられ評価されているかを考察してゆくことにする。

まず、米国においては、1970年代の図書館・情報学教育に関する文献 (Bress, 1973; Usher, 1973; Downen, 1977) は、主題専門教育の必要性和発展を述べており、現在も、多くの分野の主題専門教育が継続されている。

このように主題専門教育が発展し継続されている背景として、大学院教育が普及し、かつ高度情報化社会の到来に伴い、多量の専門文献を処理する必要性が高まった結果、図書館員にも主題専門知識がますます求められるようになったことがあげられる。(長澤, 1986)。

また、米国の複合学位システムのように主題専門教育として、適切なプログラムであると評価されているものも発展してきた。今後、主題専門教育を肯定的にうけとめ継続してゆくためには、次のような基準を設けることが必要であると思われる (加藤, 1991a)。

①主題専門教育としてのプログラム修了後、主題分野の専門知識を修士などの学位、またはこれに代わる資格で証明できることが必要である。このことは、「主題専門図書館員は一定の資格を有する」という統一された基準を設けることでもある。

②主題専門教育のプログラムは、図書館・情報学と主題分野において、一定の基準に達するカリキュラム内容を有することが必要である。これには、科目数や単位数で基準を設定することが考えられる。

一方これに対し、主題専門図書館員の存在と主題専門教育の継続を否定するような批判的見解も出されている。たとえば、William Katz (Katz, 1985) は、レファレンス・サービスにおいて図書館員が持っていない真の専門性は、狭い主題領域におけるものでなく、情報を扱うことにおける専門性であると述べている。

レファレンス・サービスを担当する図書館員に対して

は、Alan Ritch (Ritch, 1991; 樋口 修, 1991) も同様な見解を述べている。すなわち、レファレンス・サービスのための検索手段に関する知識が必要になってきたことに比べ、回答内容自体に関する主題知識の重要性は、相対的にみて減少している。これは、個人の記憶能力の限界をはるかに越えて情報が蓄積されている一方、適切な検索手段の知識を得れば、必要とする情報が確実にまた効率的に入手できるようになったことに起因するものである。主題専門家は依然として求められてはいるが、それ以上に最新の情報技術やネットワークを熟知した者が求められているとしている。

さらに Williams と Zachert (Williams, *et al.*, 1986) は、主題専門教育は今日の情報社会において、その専門性を非常に狭い範囲に限定してしまい、また情報専門家の中に不必要な役割を作ってしまうという論争があることを指摘している。また、ライブラリー・スクールの学生の多くは、卒業後の進路や就職のために、あまり限られた主題専門教育よりも、広い可能性のある一般的なプログラムを好む傾向があるという報告もされている (Jane, 1986)。

主題専門教育に対するこのような批判は、英国の図書館・情報学教育の中で、実際に、主題専門教育の継続を否定してしまった。その例として、英国の音楽分野の主題専門教育がたどった経過をあげることができる。すなわち、1970年代前半までは、図書館の中で主題専門制がかなり受け入れられており、その結果として音楽分野の主題専門教育も多くのライブラリー・スクールでおこなわれていた (Brian, 1979)。しかし、1970年代後半から、図書館で情報サービスが拡大されるとともに、それまでの主題専門制に行き詰まりが現れ、ライブラリー・スクールでは情報学が導入され始めた。このような動向の中で、1980年代に入ると一変して主題専門教育が消滅したわけである (Miller, 1983; 加藤, 1991a)。それに代わり、ライブラリー・スクールでは情報学の急速な導入や、インフォメーション・マネージメント (information management) のコースが開設された。その背景には、文教予算が削減されたことや、英国の図書館・情報学教育の将来方向に関するいくつかの報告書が、図書館・情報サービスの急速な変化に対応するために、ライブラリー・スクールのカリキュラムに情報技術や経営管理法などを大幅に取り入れることを勧告したことも影響している (田村, 1990)。

英国の場合は、図書館・情報学教育の中で、主題専門

教育が否定されたが、一方、現在、比較的肯定的に考えられている米国やその他の国々においても、主題専門教育をとりまく環境は、大きく変化している。1980年代に入り、ライブラリー・スクールに情報学が急速に導入され、主題専門教育は新たな転機を迎えている。すなわち、今までのような主題専門制とは別に、情報を扱うことにおける専門性が評価され始めている(齊藤, 1989)。その背景として、情報処理技術が発達し複雑化したことで、情報を扱うことに専門的知識が必要となってきたことがある。そこでライブラリー・スクールでは、こちらの教育が重要であり、また重点をおくべきであるという見解も多い(Robbins-Carter, *et al.*, 1986; Fasick, 1986; Buckland, 1986)。

また、専門主題における情報要求が、非常に高度にまた多様になってきたため、従来の主題専門教育では対応しきれなくなってきた。その背景として、研究分野の分化が進み、より専門的な要求水準が高まったこと、その一方で、より広い学際的分野に対する要求が増えたことが考えられる。

このような状況の中で、図書館・情報学の専門知識と研究分野の主題知識を備える、一歩進んだ新しい主題専門図書館員が要求されている。このような主題専門図書館員を養成するためには、図書館・情報学教育と主題分野の専門教育の両方が、充実したプログラムで提供されることがまず必要である。そこでこの条件を満たすことのできる教育プログラムとして、米国で採用されている複合学位システムの可能性を評価することができる(加藤, 1991a)。複合学位システムは現段階では大学によるレベルの格差が問題となっている。そこで、今後、プログラム構成や単位数に何らかの基準を設けることが必要であり、さらに現在の要求を満たす主題専門図書館員を養成するために、プログラムの質を高めてゆくことが課題であると思われる(加藤, 1991a)。

最後に別の観点からの意見を紹介しておく。現在の情報化社会において、図書館・情報学の専門知識と研究分野の主題知識の両方を一人の図書館員が備えることは容易ではない。そこで、一人の図書館員が両方の専門家になるというのではなく、Warren J. Hass (Haas, 1991)が指摘するように、将来、図書館は様々な領域や技術について個別に専門家を養成し、複数の専門家を備える必要があるという意見もある。彼は、その中には情報専門家もおり、また種々の分野の主題専門図書館員も含まれると述べている。

## VIII. おわりに

本稿では、大学図書館における主題専門図書館員を米国の主題部門制と英国の主題専門制という図書館業務の組織形態の歴史的推移と共に概観し、その役割を明らかにした。さらに主題専門図書館員の養成制度である主題専門教育の歴史的推移を概観し、現在の教育システムの提示とその評価を行い、今後の展望を検討した。

米国の主題部門制や英国の主題専門制が大学図書館の組織形態として導入され定着してくると共に、主題専門図書館員はその地位を確立してゆき、主題分野における種々のサービスを担当し責任を委ねられた。その後、主題部門制は1960年代から、主題専門制は1970年代後半から徐々に衰退していったが、それと共に主題専門図書館員の役割にも変遷がみられた。現在は図書館・情報学の専門知識と主題分野の専門知識をもった新しいタイプの主題専門図書館員が必要とされている。そこで、このような専門家を養成する主題専門教育に対しても、従来とは異なったプログラムが要求されている。その中で主題専門教育の一つである複合学位システムは、現在の大学図書館における情報要求に応えることのできる新しい主題専門図書館員を養成することが可能な教育システムとして期待される。

今回は、主題専門図書館員の役割について、個別の大学図書館における個々の事例は取りあげなかった。今後、その変遷と現状をより明らかにするために、このような個々の事例を分析して行く必要があると思われる。また、主題専門図書館員と主題専門教育に関して、さらに詳細な評価をしてゆく必要があると思われる。そのためには、今後大学図書館において真に主題専門図書館員という人材が必要とされるのかを明らかにし、もしそうであれば、将来期待される主題専門図書館員の役割や、情報専門家との相互関係なども追求していく必要がある。そして、図書館・情報学教育の中で、主題専門教育がどのような位置づけをされるのか、また、どのような方法で提供されるのが最善であるのかということも、さらに検討してゆかなければならない課題である。

Bress, Mina Akins. The Challenge for Library Schools: A Student's View. *Special Libraries*. Vol. 64, p. 423-437 (1973)

Buckland, Michael K. Education for Librarianship in the Next Century. *Library Trends*. Vol. 34, No. 4, p. 777-788 (1986)

- Cohen, M. L. Education for Law Librarianship. *Library Trends*. Vol. 11, p. 306-314 (1963)
- Coppin, Ann. The Subject Specialist in the Academic Library Staff. *Libri*. Vol. 24, p. 122-128 (1974)
- Cveljo, Katherine. Business Librarianship: Information Services and Research. *Special Libraries*. Vol. 70, p. 320-327 (1979)
- Danton, J. Perian. Subject Specialists in National and University Libraries, with Special Reference to Book Selection. *Libri*. Vol. 17, No. 1, p. 42-58 (1967)
- Davies, J. Eric. Libraries in the English New Universities. *International Library Review*. Vol. 14, p. 21-40 (1982)
- Duino, Russell. The Role of the Subject Specialist in British and American University Libraries: A Comparative Study. *Libri*. Vol. 29, No. 1, p. 1-19 (1979)
- Fasick, Adele M. Library and Information Science Students. *Library Trends*. Vol. 34, No. 4, p. 607-621 (1986)
- Geers, Doris and others. A Documentation Scientist with or without Specialist Subject Knowledge. *Nachrichten fuer Dokumentation*. Vol. 38, p. 297-299 (1987)
- Guttsman, W. L. Subject Specialization in Academic Libraries: Some Preliminary Observations on Role Conflict and Organizational Stress. *Journal of Librarianship*. Vol. 5, No. 1, p. 1-8 (1973)
- Haas, Warren J. 来たる時代の情報アクセスをめぐる諸問題. '91 来たる時代の情報アクセスをめぐる諸問題. 金沢工業大学ライブラリーセンター. p. 1-1-1~1-1-1(シンポジウム講演集より), 1991.
- 樋口恵子. 大学図書館の将来に関するデルファイ調査. *Library and Information Science*. No. 28, p. 21-59 (1990)
- 樋口修. レファレンス・ライブラリアンの将来: 情報化社会に居場所はあるか?. *カレントアウェアネス*. No. 144, p. 4-5 (1991)
- 平尾行蔵. 情報検索の仲介者としての主題専門家. 特集: 義塾における21世紀の図書館サービス<II>. *KULIC*. Vol. 24, p. 2-5 (1990)
- 岩淵泰郎, 常磐繁. 図書館職員の専門職性についての意識に関する研究. 東洋大学社会学研究所・研究報告書. 第9集, 1990, 138 p.
- Johnson, Edward R. Subject-Divisional Organization in American University Libraries, 1939-1974. *Library Quarterly*. Vol. 47, No. 1, p. 23-42 (1977)
- 加藤修子. 図書館・情報学教育における主題専門教育: アメリカにおける音楽分野の主題専門教育を中心に. *図書館学会年報*. Vol. 37, No. 3, p. 125-138 (1991a)
- 加藤修子. 主題専門教育としての複合学位システム. 三田図書館・情報学会 1991 年度研究大会予稿集. p. 31-34 (1991b)
- 加藤修子. 図書館・情報学教育における音楽分野の主題専門教育. *音楽図書館協議会 20 周年記念論文集*. (1993 年 4 月刊行予定)
- Katz, William. Introduction to Reference Work, Vol. 2, Reference Services. 5th ed. New York, McGraw-Hill, 1985, p. 31-35.
- Kendrick, Aubrey. The Educational Background and Work Experience of Academic Business Librarians. *RQ*. Vol. 29, No. 3, p. 394-399 (1989)
- Koenig, M. E. D. Education for Special Librarianship. *Special Libraries*. Vol. 74, p. 182-196 (1983)
- Lancaster, F. W. Educating the Agricultural Information Specialist. *Revista AIBDA*. Vol. 6, p. 101-124 (1985)
- Laux, Wolfrudolf. Aspects of Education and Training for Library and Information Professionals in the Federal Republic of Germany. *Libri*. Vol. 40, No. 2, p. 101-111 (1990)
- Lemke, Antje B. Alternative Specialities in Library Education for Librarianship. Vol. 8, p. 285-294 (1978)
- Lesle, Luts. The Education of Music Librarians in the Bundesrepublik Deutschland. *Fontes Artis Musicae*. Vol. 25, p. 73-76 (1978)
- Mackenna, R. O. "5. University Library Organization". *University Librnry History: An International Review*. Tompson, J. ed. London, Clive Bingley, 1980. p. 92-108.
- Marchant, Maurice P.; Wilson, Carolyn F. Developing Joint Graduate Programs for Librarians. *Journal of Education for Librarianship*. Vol. 24, No. 1, p. 30-37 (1983)
- Michalak, Thomas J. Library Services to the Graduate Community: the Role of the Subject Specialist Librarian. *College and Research Libraries*. Vol 37, p. 257-265 (1976)
- Millar, Miriam. "10. Music Libraries". *British Librarianship and Information Work 1976-1980*, Vol. 2, Special Libraries, Materials and Processes. L. J. Taylor, ed. London, The Library Association, 1983, p. 89-93.
- 三浦逸雄, 菊池しづ子, 森智彦, 堀川照代. 大学図書館員の知識ベースと図書館学教育 I: 「図書館学教育の実態と改善に関する調査——大学図書館編」の報告. *図書館学会年報*. Vol. 37, No. 2, p. 49-63 (1991a)
- 三浦逸雄, 菊池しづ子, 森智彦, 堀川照代. 大学図書館員の知識ベースと図書館学教育 II: 「図書館学教育の実態と改善に関する調査——大学図書館編」の報告. *図書館学会年報*. Vol. 37, No. 3, p. 103-116 (1991b)
- 宮部頼子. 米国の図書館情報学教育. *情報の科学と技*

- 術. Vol. 40, No. 5, p. 312-320 (1990)
- Moore, Nick. Library and Information Education in Britain: the Scope and European Cooperation: *Libri*. Vol. 40, No. 2, p. 153-168 (1990)
- 長澤雅男. 図書館教育の動向. 図書館学会年報. Vol. 32, No. 4, p. 177-182 (1986)
- 長澤雅男. “15 大学図書館”. 図書館学研究入門: 領域と展開. 長澤雅男, 戸田慎一編. 東京, 日本図書館協会, 1990. p. 235-252.
- Nein, Ken. The Class of '86 An Insider's Report of the Graduating Class of Librarians in Public Music Libraries in West Germany. *Fontes Artis Musicae*. Vol. 33, p. 274-275 (1986)
- Neway, Julie M. Information Specialist as Team Player in the Research Process. (New Direction in Librarianship, No. 9) Westport, Conn., Greenwood, 1985.
- 野添篤毅. 国際情報化時代における医学図書館の戦略: 今日, 求められる医学図書館員像. 週刊医学界新聞. No. 1951, p. 4 (1991)
- Person, Roland. A New Path: Undergraduate Libraries at United States and Canadian Universities, 1949-1987. Westport, Conn., Greenwood, 1988. 183 p.
- Redfern, Brian. The Library School's Role in the Training of Music Librarians. *Brio*. Vol. 16, No. 2, p. 31-34 (1979)
- Ritch, Alan. “Back to the Future: From Desk Set to Desklessness?”. Rockman, Iliene F. ed. Reference Librarian of the Future. *Reference Services Review*. Vol. 19, No. 1, p. 71-80 (1991)
- Robbins-Carter, Jane; Seavey, Charles A. The Master's Degree: Basic Preparation for Professional Practice. *Library Trends*. Vol. 34, No. 4, p. 561-580 (1986)
- Roberts, Don L. Education for Music Librarians in the United States and Canada. *Fontes Artis Musicae*. Vol. 32, p. 59-62 (1985)
- Roper, F. W. Library School Education for Medical Librarianship. *Bulletin of the Medical Library Association*. Vol. 67, p. 359-364 (1979)
- 齊藤陽子. 英国の大学図書館における主題専門制. 社会教育学・図書館学研究. Vol. 13, p. 31-42 (1989)
- Shoham, S. A Cost-Preference Study of the Decentralization of Academic Library Services. *Library Research*. Vol. 4, p. 175-194 (1982)
- 田村俊作. 英国の図書館・情報学教育. 情報の科学と技術. Vol. 40, No. 5, p. 312-329 (1990)
- Tees, Miriam. Graduate Education for Special Librarians: What Special Librarian Are Looking for in Graduates. *Special Libraries*. Vol. 77, p. 190-197 (1986)
- Thompson, James; Carr, Reg. An Introduction to University Library Administration. 4th ed. London, Clive Bingley. 1987. p. 172-178.
- Usher, Elizabeth R. The Challenge for Library Schools: An Employment View. *Special Libraries*. Vol. 64, p. 439-441 (1973)
- Van Orden, Phyllis J. “Education, Library”. The ALA Yearbook of Library and Information Services 1989. ALA. 1989. p. 105-107.
- Van Orden, Phyllis J. “Education, Library”. The ALA Yearbook of Library and Information Services 1990. ALA. 1990. p. 107-110.
- Vance, Kenneth E.; Magrill, Rose Mary; Downen, Thomas W. Future of Library Education: 1975 Delphi Study. *Journal of Education for Librarianship*. Vol. 18, p. 3-17 (1977)
- Wattenberg, Ulrich. ドイツ連邦共和国における図書館情報学教育. 情報の科学と技術. Vol. 40, No. 5, p. 337-342 (1990)
- Wilkinson, J. P. Subject Divisionalism: A Diagnostic Analysis. *Advances in Library Administration and Organization*. Vol. 2, p. 21-38 (1983)
- Williams, Robert V.; Zachert, Martha Jane K. Specialization in Library Education: A Review of the Trends and Issues. *Journal of Education for Library and Information Science*. Vol. 26, No. 4, p. 215-232 (1986)
- Woodhead, P. A. Subject Specialization in Three British University Libraries: A Critical Survey. *Libri*. Vol. 24, No. 1, p. 30-60 (1974)
- Woodhead, P. A.; Martin, J. V. Subject Specialization in British University Libraries: a Survey. *Journal of Librarianship*. Vol. 14, No. 2, p. 93-108 (1982)
- 山本順一. 苦悩するアメリカ図書館学教育. 図書館界. Vol. 43, No. 5, p. 216-227 (1992)
- Young, Bradford. Education for Music Librarianship. *Notes*. Vol. 40, No. 3, p. 510-528 (1984)